

林芙美子「鶴の笛」を読む

柴 市 郎

はじめに

林芙美子（一九〇三～一九五二）の代表作といえ
ば、真っ先に想起されるのは『放浪記』（一九三〇・八、
〈新鋭文学叢書〉、改造社。『放浪記第三部』
一九四九・一、留女書店。『放浪記Ⅱ』一九四九・二、
新潮社。『放浪記（全）』一九五〇・六、中央公論社。
など）であり、同時に、戦後の作品である「うず潮」
（一九四七・八～一一、『毎日新聞』連載）や「晩菊」
（一九四八・一一、『別冊文芸春秋』）、あるいは「浮
雲」（一九五〇・九～五一・四、『文学界』連載）、絶
筆となった「めし」（一九五一・四～七、『朝日新聞』
連載）他の作品を思い浮かべる方も多いだらう。こ
れらは、いずれも映画化されてもおり、そちらで親

しまれている場合も少なくないだろう。長編ではな
いが、往時の尾道のさまが活写されている「風琴と
魚の町」（一九三二・四、『改造』）を逸するわけには
いかないという意見もあるう。本稿では、それら林
芙美子の文業を代表する大作ではなく、芙美子文学
のもうひとつの世界である童話作品の中から、戦後
間もない時期に発表された「鶴の笛」という掌編を
取り上げ、読解を試みる。そこには小説とは異なる
かたちで、芙美子の胸懷を垣間見ることができ
のではないだろうか。

「鶴の笛」について

昭和二十一年、その前年の十月に疎開していた長
野県から帰京したばかりの芙美子は、旺盛な執筆を

開始した。「この年に発表した短編は十二編にのぼった」(今川映子「年譜」)。「鶴の笛」(一九四六・七は、「狐物語」(一九四六・八)とともに、童話雑誌『赤とんぼ』に掲載された。『赤とんぼ』(一九四六・四〜一九四八・一〇)は、戦後間もなく、実業之日本社から刊行された児童雑誌のひとつであり、竹山道雄『ビルマの豎琴』(一九四七・三〜一九四八・二)も本誌に発表された作品である。その第1号(一九四六・四)「頭言」には、「赤とんぼ会」大仏次郎、川端康成、岸田国士、豊島与志雄、野上弥生子らの名とともに、次のようにある。

どん底に落ちた日本を美と力に満ちた国に作り上げて行かねばならぬ今の子供たちに、どちらへもかたよらぬ豊かな情操を養い、暖かい心と正しい判断力を持った人間にするように、あらゆる努力を傾倒したいと思っている。大正の頃鈴木三重吉氏によって主唱された赤い鳥の運動をわれわれはまだ昨日のことにように覚えて
いる。

われわれの今度の仕事を通じて子供の世界にもう一度輝かしい文芸復興の時が将来されたな

らその喜びは限りない。

本誌に寄稿した当時の芙美子のなかには、戦争による荒廃からの復興を文芸の領域において再興の担い手たる子供を対象として実現せんとする「頭言」にみられる理想への共鳴が存していたと史料することは難くないが、そのことは本稿における「鶴の笛」一篇の分析を通じ改めて検証されていくであろう。

「鶴の笛」梗概

本篇はごく短い作品であるが、未読者を考慮し以下に本文の引用を含めた梗概を付しておく。

昔、「きょん」の続いた年があり、村にいたたくさん鶴は食べ物を探し、遠くに飛んでいってしまった。「足の悪い鶴」と、その「お嫁さん」だけが村に残された。ある日、「お嫁さん」が水際で食べ物を探していると、「何ともいへない美しい笛の音色」が聞こえてきた。それは、同様に食べ物を探していた夫の鶴が、沼のなかから偶然見つけ出して、吹いていた横笛の音だった。その音色の美しさに、鶴の夫婦は「いままで食べることばかり考

へて、いつもよくよくよしてゐたことが馬鹿々々しくなる。笛を拾ってからは、自分たちを置いて去っていった鶴たちに対する恨みもふたりの心を去り、夫婦は食べ物の乏しい生活にも満足し、楽しかった思い出話をしつつ、去っていった鶴たちの幸福を願うようになる。

「お嫁さん」が、食べ物を求めて飛んでいると、「いままで見たこともない澤山の小魚」のいる小さい沼が見つかり、そこでとった魚をおみやげにして帰る途中、三羽の子供を連れた夫婦と出会う。村を捨てた夫婦は、「どこへ行つてもいいところはなく」、ふたりの子供を病気で亡くし、「いゝところ」を探してさまよううちに、「何ともいへないきれいな笛の音」にひかれ、やって来たとのこと。「お嫁さん」は、この親子を彼らが捨てた村まで案内し、自分たち夫婦は少ししか食べなくても、親子にたくさん食べるようすすめる。七羽の鶴は、「どんなことがあつても、のぞみをすてないで、こゝで元氣に働いて暮」そうと話し合う。

「お嫁さん」に魚のたくさんいる場所を教えられ、七羽の鶴は「しつそな氣持で、いつもたのしい食事をすることが出来るようになった。ある美しい月

夜、誘われるように「足の悪い鶴」が笛を吹く。それにつれて子供の鶴も歌い出す。「金色の空」からは、「二羽二羽、三羽四羽」、村を捨てていった鶴たちが笛の音に惹きつけられて戻って来た。

〈昔話風童話〉としての「鶴の笛」

「鶴の笛」は「昔、きんぐのつゞいた年がありました。その村には鶴が大變たくさんおりました」という冒頭から始まる。作品内の時間を示す言葉として「昔」という時代を特定しない表現が用いられ、舞台となる「村」の場所も特定されない。こうした特徴は、「昔々あるところに……」という〈昔話〉における発端句と共通している。作中に登場する鶴たちが名前を与えられていないことを含め、作品が固有名詞を排除した世界として構成されている点も本作と〈昔話〉の類縁性を示している。これらを以て「鶴の笛」の枠組みをひとまず〈昔話風童話〉と規定しておくことはできよう⁽³⁾。

しかし、この作品を不特定の過去・場所において自己完結している物語とみなすことは可能だろうか。作品は、「きんぐがつゞいたため、生活に困窮した住人（鶴たち）」がその地を捨て去った「さび

しい沼地」に残された「足の悪い鶴と、そのお嫁さん」を軸として語られていく。この設定に、本作が成立した時代状況との関連を認めないことは寧ろ困難であろう。ここで、作品成立の経緯を芙美子が置かれていた状況と絡め、作者じしんの言葉をたどりつつ確認しておかねばならない。芙美子は、世界大戦末期、長野県にある小さな温泉地（神林および門間）に疎開していた。⁴ 芙美子は「鶴の笛」と同時期に発表したエッセイ「童話の世界」〔『新潮』一九四六・七〕で、自由な執筆活動はもとより「米、麦、うどん、味噌、醤油以外の配給物といつてはほとんどない」生活を余儀なくされていた当時、「戦争のあらゆる障害に対して、この現実を相手にして物を書くといふことは、それ自身罪のやうにも思へ、どうしていゝのか支へすらもないみじめな田舎暮らしのなかで、私は童話を書くことが唯一の救ひであった」と回顧している。

その次（「蛙県蛙村の蛙どん」の次。引用者）に書いたのが、「鶴の笛」といふ童話だった。丁度、秋のころで、村にはさゝやかな祭があったし、私の知りあひのお百姓が笛を上手に吹いたのからヒントを得て書いた。童話を書いてゐ

ると、何にも拘束されない自由な思ひがひれき出来た。読者はほんの五六人の村の子供たちだったのので書く方もなかなか力はいった。（同前）

これに拠れば本作は、長野での疎開中、食料事情がいよいよ厳しさを加え、自由な創作もままならない状況下で少数の子供たちを最初の読者として執筆されたことになる。童話の創作を通じ、「何にも拘束されない自由な思ひがひれき出来」る充実感を覚えながら、それがまた当時の芙美子にとり「唯一の救ひ」であつたとされていることを「鶴の笛」についても考えあわせていく必要がある。

「きょん」続きのため食料不足にあえぐ鶴たちを描いた本作と作品成立時の時代背景との間のつながりについて先に触れたばかりだが、日々の食べ物にも事欠き、「戦争のあらゆる障害」に直面し「現実を相手にして物を書く」すべを見出せずにいた作者にとつては、現実性を捨象し時・場所を特定しない昔話風の枠組みこそ、かえって胸中の「ひれき」を可能ならしめる要件であつたとも考えられる。

戦争末期から戦後間も無くにかけての芙美子に關し「童話の世界」というエッセイが示唆するところ

は多岐に及ぶのだが、童話というジャンルに寄せる
思いについて次のごとく述べられている。

この戦争のために折角の童話の水準が落ちこ
んでしまひ、いろんな激しい議論もあらうけれ
ど、この失はれた以前の童話の世界を、私達大
人は何とかして盛りかへさなければ子供の為
に不幸だと思ふのである。(中略) この童話は、
皇太子さまにかぎらず、貧しい子供達もよろこ
んで読んでゐるのですよといった。そんな美し
い広々とした日本の童話を創る人はないものか
と私は考へてゐる。あまりに童話の世界が忘れ
られてゐるから…。

童話は、その執筆を通じ作者に慰藉をもたらすだけ
のものではなかった。引用部から、芙美子は、戦争
によつて失われた「童話の世界」を「子供達」のた
めに「盛りかへ」すことを「大人」である自らの責
務ととらえていたことが浮かび上がる。そこには、
児童文学の復興を目指すことを謳つた『赤とんぼ』
「頭言」と通底する精神が認められる。

ところで、戦争末期に執筆され、終戦という日本
の近代史における大きな節目を経、その翌年に活字

化された「鶴の笛」にとり、終戦という歴史の結節
点はどのような意味を持つのだろうか。「童話の世
界」には、疎開中のノートには『蛙島の蛙村の蛙
どん』の話を最初にして、二年の間に七十篇ばかり
の動物集」が書き溜められたとある。それらは「そ
の動物たちはみんな平和な国をあくがれてゐるもの
ばかりだったのも、そのころの私のさゝやかな願ひ
の表現だったのだらう」(同前)と作者によつて評
されているのであるが、このノートを検証し得ない
現状にあつては『赤とんぼ』における初出本文との
間にはいかなる異同が存するかを直接閲するすべはな
い。しかし、そのことを措いても「鶴の笛」という
作品の位置づけのためには、この作家にとつての終
戦の意味を探つておくことが必要となる。そこで戦
争時代を振り返る文章と戦後の世相について書かれ
た文章との比較を通じ、この問題を検討する。戦争
の時代は、「私たちには頑固なほどながい苦しい時
代がつづいた」(『風琴と魚の町―現代文学選(14)―
あとがき』一九四六・六、鎌倉文庫)、あるいは「戦
争と云ふ恐ろしい魔物にとりつかれて、私たちは
惨酷なほどみじめな長い年月をすごしてきました」
(『女の日記』序)一九四六・四、八雲書店)と暗い

過去として振り返られている。では、戦争の終結は芙美子にとり、暗黒の時代の終焉、明るい未来への展望をただちに意味するものであり得たか。その結論は否定的なものになる。「庶民はいつの間にか、さちやうめんに戦鬪帽をかぶり、国民服を着るやうになり、胸には名前をつけて歩くやうになった。それが楽だからでもあらう。人が一寸でも自分より変つた思想、変つた性格、変つたなりふり、変つた生活をしてみようものなら、お互いに責めあひ、争ふことが目立つてきてゐた。(中略)終戦になつてからもこのくせはなかなか抜けないとみえて、民主主義といふことは人を慙すといふことなのに、お互いが狭いところで責めぎあひ、あげあしをとつてしたりがほなのが多いやうに思へる」(『童話の世界』)、また「戦争時代の日本人の氣持のなかに、この群衆的な狂気な世界が長いこと続いていて、敗戦後も、かたよつた思想が、この群衆的狂気さのなかにあつて、それが、獐猛な一種の世相をつくつていふやうに思えてなりませんでした」(『人生の河』あとがき)一九四八・一〇、毎日新聞社)とあるように芙美子の視線は、終戦後もなおファンティシズムが日本社会にはびこつたまま、狭量な人々を諷いへと駆

り立てていることをとらえている。そのまなざしは終戦による解放感とは遠く隔たつた冷めた視線でもある。戦争が終わり、民主主義が高らかに謳われる世になつても、否だからこそ、戦時中と変わらぬ「戦後のみじめな庶民の暮しを、私はやはりどうしても書かずにはゐられない」(『晩菊 芙美子文庫』あとがき)一九四九・三、新潮社)と記すところにこの作家の戦後の立ち位置がある。如上の文脈においても、川本三郎が指摘する「林芙美子の特色」としての「戦前と戦後の連続性」という指摘⁵⁾を追認することができる。

この連続性は「鶴の笛」においても例外ではない。ここで本節冒頭に立ち返る必要があるのだが、「昔、きゝんのつゞいた年がありました」という「鶴の笛」の非限定的な時代設定は、この作品がノートに記された戦争中、あるいはそれが活字化された終戦の翌年、いずれかとのみ結び付けられればよいものではない。食べ物がなくなり生活に困窮した鶴たちに捨て去られ荒廃してしまつた「鶴の國」は、戦争による窮乏に続き、戦後にあつても荒廃した状況に置かれていた日本を照らし出す鏡像でもあつた。「鶴の笛」の「昔」は、それが具体的に比定されな

いことよつて融通性を付与され、戦中の記憶を呼び起こすだけでなく、作品発表当時の戦後間もない時代状況とも結び付いているのである。その意味で「昔」は、戦中から戦後をその変化だけでなく、そこに通底するものにも注目せざるを得なかつた芙美子らしい表現であつたともいえよう。かくして物語内容が属する時間を不特定のものとする〈昔話風童話〉の枠組みを採用した本作は、作品を生み出した戦中から戦後にかけての時代相の暗喩としての性格を帯びることになつた。

主題としての〈食〉

「鶴の笛」は、一貫して食べ物（の欠乏）をめぐる話である。「きょん」の連続により「どこにもたべものがな」くなつてしまつたため、「鶴の國」の住民たちが足の悪い鶴とその妻を置き去りにして遠くへ去つてしまつたところからこの話は書き始められている。主人公である鶴の夫婦はもちろん空腹をかかえ、「鶴のお嫁さんは水ぎはのなかを、一生懸命くちばしでたべものを探してゐる」。転機は食料を探していた夫が沼でたまたま笛をみつけたことに発する。夫が「何だらうと思つてね、いろんな風に

くはへてゐたら、ふつと竹の小さい穴からきれいな音がした」。その音色に「おなかのすいてゐたお嫁さんの鶴は、ふつとおなかのくちくなるやうな氣が」するのである。かつてこの國を捨てた鶴の家族は、生活に適した豊かな土地を見つけることができなまま子供のうち二人を病気で失つて舞い戻つてきた。主人公である鶴の夫婦は、自分たちは「ほんの少したべたきりで」放浪の果てに郷里に戻つてきた家族を心からもてなす。これに続く地の文に「たつたこの間までは、みんなたべものをかくしあつて、自分たちのことばかり考へてゐた鶴たちは、よるとさはるとたべものけんかで、なかではおたがひにだましたり、きづつけあつたりして、血なまぐさいことばかりで、鶴たちは、食べものゝ事といつしよに精神的な心配で、今日はたのしいという日は一日だつてありませんでした」とあるように、本作において食べ物の欠乏は生命の維持に危機をもたらすだけでなく、精神の荒廢にもつながる問題として言及されている。

「鶴の笛」という童話にみられる〈食〉という主題について、作家論的視点からも若干の確認をしておきたい。嵐山光三郎による、作家と食べ物のつ

なかりをテーマにしたユニークな評論『文人悪食』（一九九七・三、マガジンハウス。続編に『文人暴食』。二〇〇二・九、マガジンハウス）が芙美子に関し「林芙美子―鰻めしに死す」なる章を設けていることはその好例だが、〈食〉と芙美子の文学は切っても切れない関係にある。その絶筆が奇しくも「めし」というタイトルの小説であったこと、亡くなったのは『主婦の友』の連載記事「名物食べ歩き」のための取材（一九五一・六）からの帰宅後であったこと、いずれも因縁めいてさえある。川本三郎は、こうした芙美子の文学における〈食〉について、以下のように述べている。「林芙美子は食することにこだわった作家である。その作品には実によく食の場面が出てくる。作品の題名からして『寿司』『うなぎ』『めし』『牛肉』と食べものが多い。（中略）林芙美子は美食家のように食べものに優劣をつけようとしていくわけではない。ただ、食べることによって生きる力を得ようとしている。朗らかになろうとしている。わずかとはいえ自分で働いて稼いだ、かけがえのない金で、腹いっぱい食べようとしている。だからそもそも、まずい食べものなどあり得ない。何を食べてもうまい。そこに林芙美子の基本がある。人生肯

定がある」。芙美子の文学の根幹に触れたこの指摘を、「鶴の笛」発表の二年後の佳作「うなぎ」（『文芸読物』一九四八・五）を例として取り上げ検証する。この小説では、海軍中将を父に持つ名家に生まれ、子爵で外交官の金山と結婚し、豊かな生活を享受してきた主人公・小夜乃が、戦後の騒乱とともに家の没落に遭い、ふたりの子供を持ちながらも「天涯に家なき女になり果ててゐるやうな侘しさ」に襲われ、駅で一緒になった男と浮気をする――という、梗概だけを書くとも寒々しい話ではあるが、戦前の自作を「綺麗ごと」に終わらせてゐる女学生の生態が気に食はない」（『泣虫小僧』あとがき）一九四六・九、あづみ書房）と冷徹に突き放す視座を獲得している芙美子にしてみれば、この作品が主婦の浮気という主題をとりわけ扇情的に取り上げようという意図のもとに書かれたものでないことは言うまでもなく、これもまた芙美子が表現せずにはいられないとした「戦後のみじめな庶民の暮し」の一つのかたちとして、書かれるべくして書かれた物語とみなすことができよう。「うなぎ」の主人公は、ゆきずりの男とともにした宿で迎えた朝、窓から「すぐ眼と鼻の狭い露地の中で、若い男が、こつちを向いてうなぎを

さいてゐるところ」を見かける。そして、たれをつけて焼かれるうなぎの「香ばしい食欲をそゝる匂ひ」に刺激され、「男の胸の中に頭をくつつけて行」く。そして、「かりそめの、かうした冒険も、いつまでも続くものではないと云ふ事をよく知つてはゐたけれども、せめて、もう一度、こんな思ひでないところで、男に本心を吐露してみたいやうな気がした。男がどんな悪人であらうともかまはないのだ。」と小説は結ばれている。川本の言葉に「ただ、食べることによつて生きる力を得ようとしている」とあつたように、この「うなぎ」でも、〈食〉への欲望が、主人公をして、妻でも母でもない女としての生Ⅱ性を覚醒させる契機となつてゐる。〈食〉は、芙美子の文学にとつて、生命維持のための本能としての食欲を超越した、生と結びついた主題にもなつてゐるのである。川本の「林芙美子にとつて重要なのは、あくまでも『言葉』よりも『めし』なのだ。徹底した現実生活者であり、個人主義者である」という解釈にも一理あるとせねばならない。

こうした芙美子の文学と〈食〉との深い関わりへの指摘が存在する一方で、「鶴の笛」は、芙美子の文学におけるいわば〈食〉至上主義が相対化される

話であるという点で興味深いものがある。主人公である鶴の夫婦は、すでに触れているように「美しい笛の音色」によつて飢餓感から救済され、自分たちを置き去りにして去つていった他の鶴たちを恨む気持ちからも解き放たれ、かえつて彼らの幸福を願う心境になつていく。切実であつた〈食〉への執着は「馬鹿々々し」いものとして相対化される。困窮のあまり「村」に戻つてきた鶴の一家へ食べ物の供与した鶴の夫婦の優しさは、彼らに通じ、やがて「七羽の鶴」は食べ物を分け合いながら「しつそな氣持」を忘れず、「しあはせ」をかみしめて暮らしていく。このように飢えがもたらす精神的貧困を克服した鶴たちを描く本作は、作者にとつて「生きる力」の源である〈食〉よりも、さらに重要なものを示唆しようとしてゐるのである。「きれいなこゝろがいつもいゝ、／まづしくてもこゝろはゆたか、／みんなだわけあつて、／みんな働いて、／いつもきれいなこゝろで、／みんなを愛しあつてゆきませう」。作品末尾近くに置かれたこの詩は、その表現の文学性に対する評価は措くとしても内容的にはこの重要なものについて端的に述べられたものとみなすことができる。ここに表明された素朴な道徳性は、同時

期に書かれた『放浪記』あとがき（一九四六・七）にある芙美子の以下の言葉と響きあうものである。

「文化が戦争に敗けてよい筈はありません。切角、日本も戦争に敗けたのですから、この尊い敗戦を生かして、私たちはいゝ生きかたをしたいものです。人をうらぎったり、人をいぢめたりしない、悠々とした美しい逞しい文化を築きたいものです。（中略）まづ人を愛して生きませう。お金をためていやな生きかたをするより、人間の生活をたのしくする生活に没頭したいものです」。芙美子は、「敗戦」からの日本の復興が単に物質面の豊かさの獲得によつてではなく、精神面・道徳面の向上を通じてなされていくことを望んでいたのである。「鶴の笛」における〈食〉という主題の相対化はこうした作者の思いとかわつていく。

「鶴の笛」に託された〈夢〉

「鶴の笛」には、芙美子の文学にとり重要な主題である〈食〉をすら相対化する理想が語られていた。物質的には貧しくとも精神的な豊かさを失わず「きれいなこころ」で、互いに謙虚に「愛しあ」い、助け合つて生きていく。——という理想は、その実現

の方途を具体的に示していないという点で、芙美子の抱いた〈夢〉といつてもよい。しかし、その〈夢〉が芙美子にとっては空虚な夢想ではなく、当時の切実な心底と通い合うものでもあったことを『放浪記』あとがき「はうかがわせていた。長く続いた飢饉によつて多くの住民がいなくなり、荒れ果ててしまった「鶴の國」（傍点引用者）にふたたび鶴たちが舞い戻ってきたことを描いた「鶴の笛」の結末が、「稀有なこの長い不幸な戦争」（『林芙美子選集』自作に就て）、文末に「昭和二十一年五月」とあり）のために荒廃したこの國の復興に寄せる芙美子の思いとつらなっていることは疑うべくもない。足の悪い鶴が奏でる笛の音は、鶴たちの傷つき荒んだ心を慰撫し、他者への寛容の心呼び起こすだけでなく、その「笛の音色にさそはれて」鶴たちはかつて捨てた自分たちの「國」に戻つてくるのである。この展開は、笛の音に象徴される音楽のすばらしさに対する単なる讃歌ではない。その証左を結末部分にみることができる。この作品は、先に引いた「きれいなこころがいつもいゝ、／＼……」という理想を謳った詩に続く、「鶴の笛はいつもさういつてピヨピヨロとやさしくなつてゐたのです」（傍点引用者）と

いう一文によって結ばれている。「鶴の笛」発表と

同じ年に書かれた文章のなかには、「この敗戦はまたと得がたく尊い記念だとおもひます。枯れきつてゐた文化のさそひ水のやうな気がします。あふれるやうな甘美な音楽や、正直に素直に書かれた文学や絵画、あらゆる自然人類の美しいものに、私たちは心を波立たさせてゐます」（『女の日記』序）という芙美子の音楽への渴望、憧憬の吐露がみられる。当時の芙美子のなかにあつた美しい音楽への憧憬が本作発表の動機の一部をなしている可能性はじゅうぶん考えられるところだが、この作品における笛は、たんに音を奏でる楽器ではなく、そこから流れ出す音色について「いつもさういつて」と記されるように明瞭な意味をもつ言語表現でもあるのだ。かくしてこの作品は、笛の音＝言葉の力が、荒廃した鶴の国を再興へと向かわせることを暗示しつつ締めくくられることになる。ここに、芙美子の言葉による表現に携わるものとしての矜持と、彼女が文学に〈夢〉みたものを認めることができるだろう。童話は、それ「を書いてゐると、何にも拘束されない自由な思ひがひれき出来た」と芙美子によって語られたように、この〈夢〉を盛るに相応しい器でも

あつた。

もう一点、本作の〈昔話風童話〉としての枠組みとかかわる問題について言及しておく。冒頭にある不特定の「昔」に対応する表現として、末尾近くに「にぎやかな美しい鶴の國はいまもどこかにあるのでせうか……」（傍点引用者）とある。この疑問文は「にぎやかな美しい鶴の國」の「いま」の時点における存在について語り手が明言を回避し、それを読者の判断ないし想像に委ねている表現である。こうした話法は、それ固有のものではないが昔話によくみられるものであり、その意味で、この表現にも〈昔話風童話〉である本作の特徴を認めることはできようが、この文は「美しい鶴の國」の存続をめぐる文字通りの疑問文でもまして反語的表現でもない。作者が「終戦と同時に、ふくいくとした救ひのある国柄になりたいたい」（「童話の世界」と述べ、また「人をうらぎったり、人をいぢめたりしない、悠々とした美しい逞しい文化を築きたいものです」（傍点引用者）とも語っていたことはすでにみた通りである。「美しい鶴の國」は、彼女が願った戦後の日本のあるべき姿の暗喩でもある。この疑問文の形式を借りた表現には、かくあれかしという芙美子の〈夢〉が

おのずからにじみ出ているのである。

芙美子の文学については、これまで繰り返しの虚無的な〈暗さ〉がクローズアップされてきた。⁽¹⁾〈暗さ〉がその文学を特徴づけている大きな要素であるとすることに間違いはない。が、当然ながらそれによつて彼女の文学のすべてを語り得るものではない。その文学は人生の暗部を冷徹にみつめる眼差しによつて完全に支配されているのではなく、「鶴の笛」のように素朴なまでの向日性が顔をのぞかせられることもある。以上、戦後間もない荒涼とした状況下の日本にあつて、林芙美子が「鶴の笛」という作品においてニヒリズムに屈することのない〈夢〉を描き得ていたことを確認し、その文学世界における童話というジャンルの意義に関するささやかな検証をおこなったことを以て本稿を閉じることにしたい。

註

- (1) 『林芙美子全集』第十六巻、一九七七・四、文泉堂出版株式会社。
- (2) 「はじめに」で掌編と記したように「鶴の笛」は

初出において実質、五頁に満たない作品である。また本作初出は「新日本イソップ 2」との角書を冠する。この角書は単行本『童話集 狐物語』(二四四七・一〇、國立書院)収録に際し省かれたが、初出と同時期の「いま、私は、日本イソップといふ、動物集を書いてゐるけれども」(『童話の世界』、『新潮』一九四六・七)という記述と対応するものである。

- (3) 本稿であげた昔話の基本的特徴については、関敬吾「民話概論」(『関敬吾著作集5 昔話の構造』一九八一・三、同朋舎出版)、小澤俊夫『昔話の語法』(一九九九・二〇、福音館書店)、『改訂 昔話とは何か』(二〇〇九・四、小澤昔ばなし研究所)等を参照している。

- (4) 「童話の世界」および今川映子「年譜」による。
- (5) 川本三郎『林芙美子の昭和』(二〇〇三・二、新書館)二九四頁。

- (6) 川本前掲書、一三六〜一三八頁。

- (7) 「うなぎ」からの引用は、『林芙美子全集』第十一巻(一九七七・四、文泉堂出版株式会社)による。

- (8) 川本前掲書、三二六頁。

- (9) 本作について、芙美子は「童話の世界」のなかで

「私の知りあひのお百姓が笛を上手に吹いたのからヒントを得て書いた」と語っているが、身体にハンディを抱えつつも、他者の精神へ感化を及ぼす音楽を奏でることのできる「足の悪い鶴」のイメージの源に、芙美子の「親しい友人の一人」であり、出征した日志事変で右手を失いながらも帰還した歌手・伊藤武雄の存在がかかわっているかもしれない。芙美子は、「一つも戦争の歌をうたはず、ハイネの歌とか、牝鶏と鯉、告別、そんな美しいロマンチックなものゝみを選」んで歌われた伊藤の独唱会で強い感銘を受けたこと(『波濤』序一九三九・七、朝日新聞社)を語っている。本稿の主旨からは逸れるが、この可能性についても併せて指摘しておく。

(10) 昔話において、話者は語った事柄の信憑性について免責される。「語り手はその内容の真疑に責任がなく、また証人をも喚問することができないことを最初に宣言して、昔話を始めるのである」(関前掲書、七一頁。)昔話の結(末)句は、この免責を構造的に担う一要素でもある。日本の昔話の結句にはいくつかの典型的な型があるが、その機能について、たとえば小澤俊夫は以下のように説明し

ている。「なぜ結末句が必要かという点、昔話というのは、おとぎ話、つまり『うそ』の話です。うそ話ですから、『どうして馬が三本脚になっても走れたのか』ときかれても、語り手には説明できません。それで、『ここまではうそつこの話ですよ。わたしの責任じゃありませんよ』と、ガードをはるのです。日本中の語り手がそれをやります」(『こんには、昔話です』一九頁、二〇〇九・一〇、小澤昔ばなし研究所)。結句そのものではないが、本作末尾近くでも、「美しい鶴の國」の存在に関し確言を避け、読者へ問いかける形式が採られているのもまた、語り手による話の信憑性に関する一種の責任回避である。こうした点にも「鶴の笛」と昔話との共通性をみとめることができる。

(11) この指摘は芙美子の文学の傾向について言及される際、しばしばおこなわれるものであるが、ここではその例として、「芙美子の作品の多くはいかにも暗い。そのヒロインたちは、過酷な運命に翻弄され、すべもなく流されてゆく」(磯貝英夫「評伝」、『新潮文学アルバム34 林芙美子』一九八六・八、新潮社)という一節を引いておくにとどめる。

※本稿は、尾道文学談話会（二〇一七年二〇一七年

一〇月二日）における発表「林芙美子『鶴の笛』
を読む」をその原型とするものである。また「鶴
の笛」のテキストは、単行本『童話集 狐物語』
および『林芙美子全集』第十五巻（一九七七、文
泉堂出版株式会社）に収録された本文との照合を
ふまえたうえで『赤とんぼ』初出を用いている。

—しば・いちろう 日本文学科教授—